

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

報 告 書

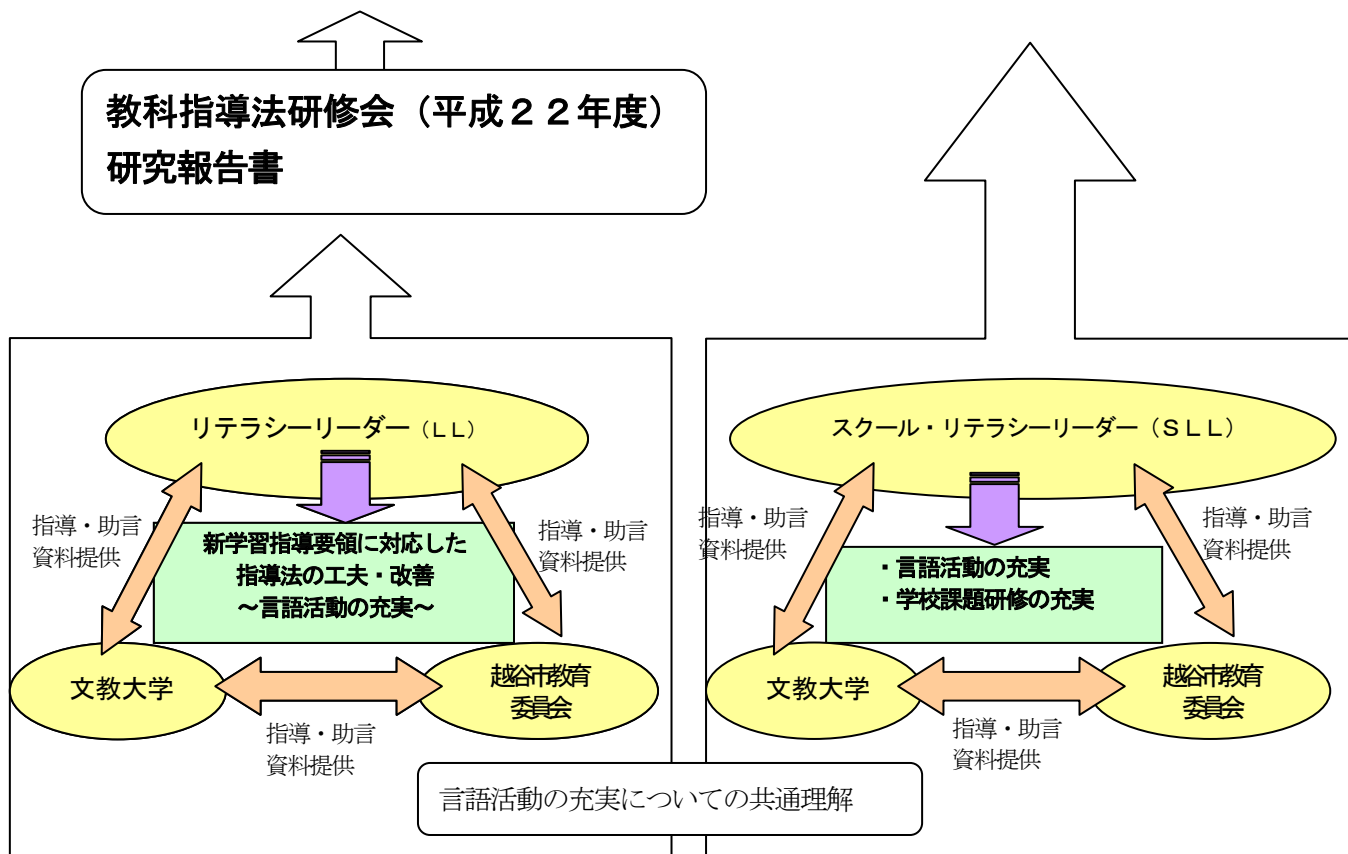
プログラム名	「言語活動の充実」に関する教員研修カリキュラムの開発・実施を通じた研修リテラシーリーダーの育成
プログラムの特徴	<p>本プログラムでは、「言語活動の充実」に関する教員研修カリキュラムの開発（言語活動のモデルチェックシート作成）と各教科でのリーダー（リテラシーリーダー：LL）と各学校でのリーダー（スクール・リテラシーリーダー：SLL）の養成が欠かせないという考えから、これらチェックシートとリーダーを核にして、各教科等、また各学校での「言語活動の充実」を図った。</p> <p>本プログラムのメインとなる、「リテラシーリーダー研修（LL研修）」は、越谷市の各学校から選ばれた7教科等の指導法改善研究員を、単に各教科における言語活動の充実をふたえた授業改善のための研修を受けるだけにとどまらず、彼らを今後、「将来の越谷市の教育を背負う人材」として、各教科等の研修の推進役・リテラシーリーダーとして育成することを目的とした研修プログラムである。</p> <p>そのため、LL研修では、「国語」「算数・数学」「社会」「理科」「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」の7教科等について、各教科4名（小・中学校から各2名ずつ委嘱）の教員を選び、越谷市教委指導課の指導主事（1名）、文教大学の教授（1名）と6人1組のチームを作って研修を行う。4名の教員のうち、2名（小・中学校各1名）は教職経験が豊富なベテラン教員、2名（同じく小・中学校各1名）は若手教員という組み合わせにして、教職経験の継承が行われるよう配慮した。ここに、指導主事および大学教員といった研究者が加わって、チーム単位で言語活動の充実をふまえた授業改善の研修（先進実践校の視察も含む）を、年間通して複数（5～7）回行うことで、LL自身の指導力の向上が図られるとともに、LL自らも、各学校での経験的な実践を生かして、研修時や授業ですぐに活用できるような資料・教材としての『言語活動チェックシート』の作成に関わった。</p> <p>こうした研修を通して育成された「リテラシーリーダー（LL）」および各学校の研修主任である「スクール・リテラシーリーダー（SLL）」としての各教員が、各教科部会や各学校における研修の推進役となり、新学習指導要領に対応した校内研修がより主体的・組織的に行われるようにしている。</p>

平成22年3月

機関名 文教大学 連携先 越谷市教育委員会

【プログラムの全体概要】

市内公立小中学校教員の
指導法改善、資質・能力の向上



越谷市教育委員会では、越谷市内の公立小中学校に勤務する教員の中から、94名の教員を教育研究員として委嘱し、調査研究・指導法改善研究・推進研究の3分野の研究を行っている。この中の、「国語」「算数・数学」「理科」「社会」「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」の7部会 計28名の指導法改善研究員をリテラシーリーダーとし、「各教科における言語活動の充実」をテーマとして文教大学と越谷市教育委員会で共同研究を行った。平成21年度分の研究成果は、研究報告書として越谷市内のイントラネットにコンテンツとして掲載した。また、平成22年度には、それぞれの教科等で「教科指導法研修会」を開催し、各学校へ成果を広める。

スクール・リテラシーリーダーについては、年間2回の「学力向上推進研修会」を開催し、各校の言語活動や学校課題研修の充実について、教育センター所長や文教大学教授が指導・助言を行い、資質・能力の向上を図った。

1 研究の意義

鳴島 甫（文教大学）

（1）「言語活動の充実」に関する指導の実態を把握できる

平成20年1月17日付け中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」の「7 教育内容に関する主な改善事項」の第1番目に「言語活動の充実」が挙げられた。これは、教科「国語」のみならず「各教科を貫く重要な改善の視点である。」として、「各教科等においては、このような国語科で培った能力を基本に、知的活動の基盤という言語の役割の観点からは、例えば、観察・実験や社会見学のレポートにおいて、視点を明確にして、観察したり見学したりした事象の差異点や共通点をとらえて記録・報告する。（理科・社会等）比較や分類、関連付けといった考えるための技法、帰納的な考え方や演繹的な考え方などを活用して説明する。（算数・数学、理科等）仮説を立てて観察・実験を行い、その結果を評価し、まとめて表現する。（理科等）などそれぞれの教科等の知識・技能を活用する学習活動を充実することが重要である。また、コミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関しては、例えば、体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現する。（音楽、図画工作、美術、体育等）体験活動を振り返り、そこから学んだことを記述する。（生活、特別活動等）合唱や合奏、球技やダンスなどの集団活動や身体表現などなどを通じて他者と伝え合ったり、共感したりする。（音楽、体育等）体験したことや調べたことをまとめ、発表し合う。（家庭、技術・家庭、特別活動、総合的な学習の時間等）討論・討議などにより意見の異なる人を説得したり、協同的に議論して集団としての意見をまとめたりする。（道徳、特別活動等）などを重視する必要がある。」と具体的な学習活動を含めて示されたものである。

しかし、ここで示されたような指導に実際に取り組む段になると様々な問題がおきってくる。一つは、この答申中の「4 課題の背景」でも「本来、教科では、基礎的・基本的な知識・技能を習得しつつ、観察・実験をし、その結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で、知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述する」といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を行い、それを総合的な学習の時間における教科等を横断した課題解決的な学習や探究活動へと発展させることが意図された。これらの学習活動は相互に関連し合っており、截然と分類されるものではないが、知識・技能を活用する学習活動やこれらの成果を踏まえた探究活動

を通して、思考力・判断力・表現力等がはぐくまれる。

しかし、各教科においては、授業時数が削減される中で、知識・技能を活用する学習活動については指導や成績評価が難しいこともあって、これらの学習活動の学習活動の意義が理解されず、十分におこなわれているとは言いがたい。そのため、各教科での知識・技能の習得と総合的な学習の時間での課題解決的な学習や探究活動などとの間に段階的なつながりが乏しくなり、学校の教育活動全体を通じて、我が国の子どもたちの思考力・判断力・表現力等が十分に育成されていないことの原因となっている。」と指摘されている現状はいつこうに改まってはいない。

しかし、こういったことだけではない。日本での教員養成課程において、「知的活動の基盤としての言語」といった「言語」に関する科目が「児童心理学」や「青年心理学」のように「教職に関する科目」に組み込まれてこなかったことから、「言語」に関する錯誤がはなはだしい。「言語」は国語科が教え、他教科は「もの・こと」を教えるもので「言語」は関係ない、との思いは根強いものがある。また、「言語活動」に関しても、百科事典の丸写しを読み上げるだけの活動に代表されるような「思考・判断・表現」と無関係な学習活動が「言語活動の充実」を意図した授業として行われてもいるのである。

(2) 教員研修カリキュラムの開発とリーダーの養成

以上のような実態を鑑みて、「言語活動の充実」に関する教員研修カリキュラムの開発（言語活動のモデルチェックシート作成）と各教科でのリーダー（ここではリテラシーリーダーと呼ぶ）と各学校でのリーダー（スクールリテラシーリーダー）の養成が欠かせないと判断した。そして、これらチェックシートとリーダーを核にして、各教科等、また各学校での「言語活動の充実」を図ろうとしたのがこのプロジェクトである。

取り組んで1年目。前途は多難を極めている。しかし、「生きる力」を教育の理念とし、これからの日本社会を背負っていく「思考力・判断力・表現力」を備えた人材育成のためには一歩も後にはひけないところである。この間の研究の過程を参考に、それぞれの教育現場でその実情にそったカリキュラムの開発に役立てていただければ幸いである。

2 研究の概要

(2009年度)

手嶋将博 (文教大学)

1 研究課題名:「言語活動の充実」に関する教員研修カリキュラムの開発・実施を通じた
研修リテラシーリーダーの育成

2 研究組織 (2010年3月31日現在)

文教大学教育学部

No	所属・職名	氏名	担当・役割
1	教育学部・教授	鳴島 甫	国語部会 研究・研修担当
2	教育学部・教授	町田 彰一郎	数学部会 研究・研修担当
3	教育学部・准教授	手嶋 将博	総合的な学習の時間部会 研究・研修担当/事務・連絡調整担当
4	教育学部・教授	山田 陽一	理科部会 研究・研修担当
5	教育学部・教授	泊 善三郎	社会科部会 研究・研修担当
6	教育学部・准教授	栗加 均	道徳部会 研究・研修担当
7	教育学部・准教授	米津 光治	特別活動部会 研究・研修担当
8	教育学部・教授	嶋野 道弘	生活科・総合的な学習の時間部会 研究・研修担当

越谷市教育委員会指導課

No	所属・職名	氏名	担当・役割
1	指導課長	佐藤 忠弘	研修統括
2	指導課副課長	若田 範之	研修統括補佐
3	教育センター所長	片平 秀徳	研修統括補佐
4	主査	小島 久和	研究・研修 教育指導担当
5	主査	長井 圭子	研究・研修 生徒指導/算数・数学科担当
6	主査	小林 俊夫	研究・研修 教育研究/国語科担当/事務・連絡調整担当
7	主任指導主事	渡辺 康弘	研究・研修 教育指導/社会科担当
8	主任指導主事	鈴木 雅彦	研究・研修 教育研究/理科 担当
9	主任指導主事	佐藤 泰弘	研究・研修 教育指導/総合的な学習の時間担当
10	主任指導主事	磯山 貴則	研究・研修 生徒指導/道徳担当
11	主任指導主事	青木 元秀	研究・研修 教育研究/特別活動担当

3 研究経費: 2009年度 2,845千円 (独立行政法人教員研修センター平成21年度『教員研修モデルカリキュラム開発プログラム』)

4 協議会 (打合せ) の実施状況

(1) 4/17 文教大学・越谷市教委・平成21年度顔合わせ…20年度共同研究のレビュー、

- 21年度の方針決定。「教員等の研修に関する協定」の打ち合わせ等。参加者：文教大学・越谷市教育委員会の各担当者。
- (2) 4/27 文教大学・越谷市教育委員会「教員等の研修に関する協定」（一般協定および実施細目）に関する締結に向けての具体的内容・スケジュールの話し合い。
- (3) 5/8 「指導法改善研究員」（リテラシーリーダー（LL））委嘱式（於：越谷市教育センター）…越谷市の小中学校から選ばれた研究推進のための指導法改善研究員を、国語、算数・数学、理科、社会、総合的な学習の時間、特別活動、道徳の7部会各4名（小・中各2名ずつ）、計28名委嘱。参加者：文教大学教員、越谷市教育委員会指導主事、指導法改善研究員（LL）。
- (4) 5/20 第1回「教員研修推進プロジェクト会議」…21年度の研修プログラムの方針決定。終了後、各部会会合を実施（→後述（8））。参加者：文教大学・越谷市教育委員会の各担当者・教育委員会指導主事。
- (5) 6/26 文教大学・越谷市教育委員会「教員等の研修に関する協定」（一般協定および実施細目）締結・調印式（於：越谷市教育センター）。
- (6) 9/24 第2回「教員研修推進プロジェクト会議」（含：第2回「指導法改善研究部会」）…上半期の研修カリキュラムの作成・研修実施に関する報告、および、今年度下半期の活動予定の検討・確認。『言語活動チェックシート』作成に向けての共通事項の確認の後、各部会に分かれて『言語活動チェックシート』作成に関する今後の会合・スケジュール調整。参加者：文教大学・越谷市教育委員会の各担当者
- (7) 12/16 第3回「教員研修推進プロジェクト会議」…今年度の研究成果の各部会報告、およびモデルカリキュラム研究報告書としてまとめる編集方針の話し合い。参加者：大学および教育委員会の担当者。
- (8) 1/20 第4回「教員研修推進プロジェクト会議」…各部会報告を研究報告書としてまとめる編集方針の話し合い。参加者：大学および教育委員会の担当者。
- (9) 2/16 「研究の総括と来年度に向けての話し合い」…21年度の総括、来年度の連携および取り組みの確認と打合せ。参加者：大学および教育委員会の担当者。

[各部会の会合（LL研修）]

5/20 第1回「指導法改善研究部会」…7部会における大学担当教員・教委指導主事らの全員の顔合わせの後、各部会に分かれて今後の会合・研修のスケジュール

調整。参加者：文教大学教員・教育委員会指導主事。

5/20以降、国語、算数・数学、理科、社会、総合的な学習の時間、特別活動、道徳の部会毎に随時（月1回程度のペース）会合や、先進的な地域の学校等の視察を行った。LL研修各部会の会合において、新指導要領における言語活動の充実のための授業づくりについての話し合いや、先進地域の研究・実践事例視察を通して研修を進めた。さらに、各部会でモデル授業としての授業実践を行い、研修成果を具体化。部会ごとの実践をまとめ、『言語活動チェックシート』を作成、その活用を図った。（→詳細：各部会報告参照）。

5 研修の目的・日程等（・目的・日程・内容・講師・会場・受講対象者など）

- (1) 5/8 15:00～16:30、「教育研究員全体会・新学習指導要領の実現と教育研究員の役割」（於：越谷市教育センター）、講師：鳴島甫（文教大学・教育学部・教授）、対象者：指導法改善研究員（LL）28名、越谷市の小中学校から選ばれ研究推進のための指導法改善研究員（LL）の委嘱を受けた教員に対して、新指導要領の「言語活動の充実」の理解と実施および、LLの役割について周知を図るための講義。
- (2) 10/23（第1回）2/12（第2回）「学力向上推進研修会」…各小中学校で校内研修推進の核となる各校の研修主任「スクール・リテラシーリーダー（SLL）」に、大学教員および教育委員会担当者が、各教科の言語活動の充実と各学校の学校課題研修の課題解決・計画を図るための研修を実施。
- (3) 随時：各教科部会・各学校における校内研修（→詳細：各部会報告）。
- (4) 随時：各教科部会による先駆的实践校視察、学会・研究会参加（→詳細：各部会報告）。

6 作成教材等

- (1) 研修用リーフレット（パンフレット）…以下の①②を含み、各教科の指導法改善研究員（LL）や各学校の校内研修主任（SLL）に配布され、研修の資料として用いられる。

①『言語活動の充実』の研修用概念図…教員研修推進プロジェクト会議（全体会）において、大学と教育委員会の担当者によって作成された概念図。研修を受ける教員が「言語活動」を取り入れた授業づくりを進められるようにするための基本資料とした（→詳細：「5

ー 1. 全体概念図」参照)。

②『言語活動チェックシート』…各教科の LL 研修における大学教員・各教科指導主事・指導法改善研究員(LL)による提案を元に作成されたチェックシート。指導法改善研究員(LL)が、自らの研究授業のために活用した。校内研修において、「言語活動」を各教科共通で児童・生徒の学習指導に組み込めるよう留意すべき項目をチェックするための確認シート

(2) CD-ROM…成果報告書に収録しきれなかった研究の概要・打ち合わせ・研修内容や、上記(1)の②のチェックシートを作成する元になった「各教科別チェックシート」などの資料を収録。

*上記の各資料は越谷市イントラネット・コンテンツに登録され、市内の小・中学校の教員がいつでも利用可能なようにする。

7 研究報告書(※データ化の上、独立行政法人教員研修センターに提出)

「言語活動の充実」に関する教員研修カリキュラムの開発・実施を通じた研修リテラシーリーダーの育成(2010年3月31日)

3 リテラシーリーダー（LL）と

スクールリテラシーリーダー（SLL）の育成

越谷市教育委員会では、越谷市内の公立小中学校に勤務する教員の中から、94名の教員を教育研究員として委嘱し、（１）教育に関する基礎的な調査研究を行って本市教育の進展充実に寄与するとともに、市全体の教育研究が自主的、組織的、計画的にすすめられるように協力する。（２）教員の資質・能力の向上を図ることで越谷市の教育力を高め、児童・生徒に「生きる力」を育成する。（３）学校に生かせる実践的研究を行い、その成果を市内全校に普及する。という理念と使命に基づき、調査研究・指導法改善研究・推進研究の3分野において研究を行っている。その中の、指導法改善研究員をリテラシーリーダー（LL）とした。

また、各校1名の研修主任をスクールリテラシーリーダー（SLL）として位置づけ、年間3回の研修会を開催し、資質の向上を図った。

（１） リテラシーリーダー研修の概要

① 研究テーマ

『新学習指導要領に対応した指導法の工夫・改善』
～各教科等における言語活動の充実～

平成23・24年度から完全実施となる新学習指導要領では、全教科等において「言語活動」が新たに明記された。また、越谷市の全国学力・学習状況調査のB問題（特に数学）では、無回答が多く、説明を書く問題での正答率も低い結果が出ている。こうした実態を踏まえ、児童生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむための言語活動の充実を移行期間のうちから先進的に研究を深めておく必要がある。こうしたことから、上記のテーマを設定した。

また、研究を進めるにあたっては、次の点について確認した。

- ・基礎基本の定着にとどまることなく、それらを工夫して活用していく力を高めていく研究であること。
- ・思考力・判断力・表現力等をはぐくむための、「言語活動の充実」を図った研究であること。
- ・面白さや楽しさが味わえる、魅力ある授業をつくるなど、児童・生徒の学ぶ

意欲を高めるための工夫・改善を行うこと。

- ・児童・生徒側に立った、「わかる授業」を目指すための研究を行うこと。
- ・小・中の連携を意識した研究であること。

② 研究対象の教科等（7教科等）

「国語」「社会」「算数・数学」「理科」

「道徳」「特別活動」「総合的な学習の時間」

③ メンバー構成

各教科4名とし、小・中学校それぞれから2名ずつ委嘱した。委嘱に当たっては、「将来の越谷教育を背負う人を育成する」という視点から、教職経験が豊富な教員と浅い教員を組み合わせた。

④ 研究方法

ア 新学習指導要領で明記された「言語活動」について、文教大学教授が講演を行いリテラシーリーダーの共通理解を図った。

イ 各教科等の部会では、リテラシーリーダーが文教大学教授、市教委指導主事の指導の下、新学習指導要領に対応した授業づくりに向けての研究を行った。その際、基礎基本の定着、活用力の育成、言語活動の充実に留意して授業実践を行うこととした。

ウ 各部会は、それぞれの進め方に応じて視察研修等も含めて年間4～6回程度、開催した。

エ 研究2年目には、全ての教科等で指導法研修会を開催し、市内小中学校へ研究成果を提供する。研修会は授業研究会とし、リテラシーリーダーが授業を提供すること。

オ 指導案等は、デジタルコンテンツ化し、越谷市内教職員がイントラネット上で随時活用できるようにする。



(リテラシーリーダー研修会の国語部会の様子)

(2) スクールリテラシーリーダー（SLL）を対象とした研修会

スクールリテラシーリーダーに対しては、5月8日の「平成21年度研究委嘱校委嘱状交付式及び教育研究員委嘱状交付式」の中で、文教大学教授鳴島 甫先生が『新学習指導要領における「言語活動」の充実について』と題して講演を行い、リテラシーリーダーとともに言語活動の充実についての共通理解を図った。その後、以下の研修会を開催した。

① 第1回学力向上推進研修会

期 日 平成21年10月23日

会 場 越谷市立中央公民館

内 容

全国・学力学習状況調査の結果をもとに、学校が作成した「学校課題解決プラン」と「学校課題研修計画」を持ち寄り、研修推進校の実践事例発表、校内研修の効果的な推進、運営についての情報交換を行うとともに、越谷市教育センター所長が自校の課題の解決に向けた校内研修の推進」と題して講話を行った。

② 第2回学力向上推進研修会

期 日 平成21年2月12日

会 場 越谷市立千間台中学校

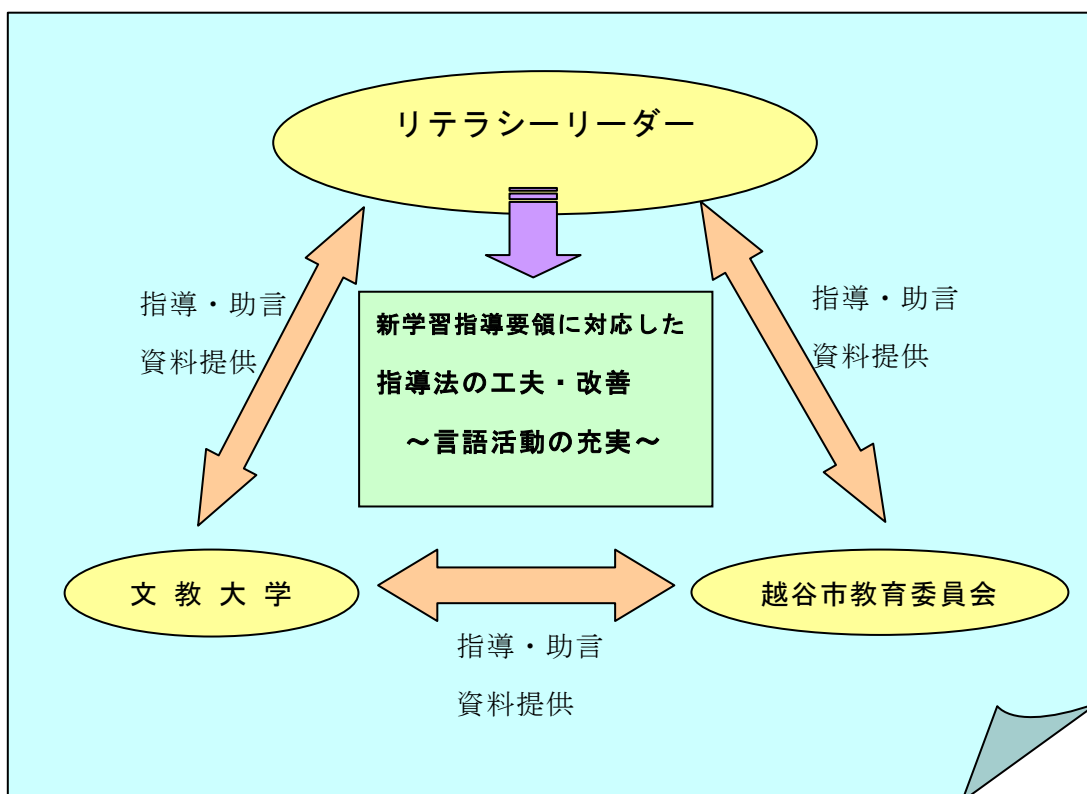
内 容

各学校における言語活動の充実と次年度の学校課題研修の推進を目的として、研修会を開催した。

まず、言語活動を取り入れた数学の授業参観の後に、指導主事より研修主任の役割や校内研修の実施計画作成について説明及び文教大学の鳴島 甫教授が「新学習指導要領における言語活動の充実と学校課題研修のあり方について」と題して講話を行った。

(3) リテラシーリーダー・大学教授・指導主事のイメージ図

文教大学		リテラシーリーダー			越谷市教育委員会	
			小学校	中学校		
代表教授	国語担当教授	国語	2	2	代表指導主事	国語担当指導主事
	社会担当教授	社会	2	2		社会担当指導主事
	算・数担当教授	算数・数学	2	2		算・数担当指導主事
	理科担当教授	理科	2	2		理科担当指導主事
	道徳担当教授	道徳	2	2		道徳担当指導主事
	特活担当教授	特別活動	2	2		特活担当指導主事
	総合担当教授	総合	2	2		総合担当指導主事



4. 各教科部会の成果報告

国語部会

国語科における言語活動の充実

小林 俊夫（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立越ヶ谷小学校 教諭 西田裕子 越谷市立花田小学校 教諭 永井恵実子
越谷市立西中学校 教諭 山崎一弘 越谷市立大相模中学校 教諭 渡邊良文
文教大学教育学部 教授 鳴島 甫

2 会合日程及び会合場所

5月 8日	委嘱状交付式	越谷市立中央市民会館
7月 3日	第1回部会	越谷市教育センター
9月25日	第2回部会	越谷市教育センター
9月29日	第3回部会	越ヶ谷小学校
12月11日	第4回部会	越谷市教育センター
1月22日	第5回部会	越谷市立花田小学校
2月 2日	第6回部会	越谷市立大相模中学校

3 先進事例見学・研究授業等

8月3、4日	第72回 国語教育全国大会（日本国語教育学会研究大会）
10月29日	越谷市立越ヶ谷小学校研究授業視察
1月22日	越谷市立花田小学校研究授業（再掲）
2月 2日	越谷市立大相模中学校研究授業（再掲）

4 国語科の言語活動充実に関する研究

1 研究の経過

（1）研究の概要

平成20年の1月に出された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高

等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の中で、改訂についての7つの基本的な考え方が示された。その一つに、「思考力・判断力・表現力等の育成」がある。具体的には、思考力・判断力・表現力等の育成については、知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて、充実させるとともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力を育成するために、小学校低・中学年の国語科において基本的な力を定着させた上で、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要があると指摘された。

このことは、「言葉の力」を学校教育全体でつけることであり、その中核となるのが国語科である、との指摘でもあった。これを踏まえて、他教科との関係を鑑みながら「国語科における言語活動の充実」を課題とし研究を進めた。本部会では本年度より文教大学鳴島甫教授に御指導をいただきながら、次の取り組みを行った。

- 思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動を組み込んだ授業の研究
- 国語科における言語活動チェックシートの作成

(2) 実践の記録

①言語活動チェックシートについて

新学習指導要領では、これまで「内容の取扱い」にあった「言語活動例を通して」という項目が「内容(2)」に移行した。このことによって、「言語活動を通して内容の(1)の指導事項を指導する」ことが強調された。すなわち、内容

(1)の能力をつけるための「言語活動の充実」がより強く求められたのである。そのためにも、活動のねらいが明確に設定され、思考・判断を伴った活動にすることが必要である。その考えのもとで、新学習指導要領国語科解説に示されている言語活動例を参考に、授業者がどのようなねらいをもって言語活動を設定しているか明確にするための「言語活動チェックシート」を作成した。

このチェックシートの作成にあたっては、当初、小学校第1学年から中学校第3学年まで共通するチェックシートの作成を考えたが、児童・生徒の発達段階や各学年での目標をかんがみて、小学校は、低・中・高学年のまとまりで、中学校は

言語活動チェックシート	小学校 第1学年及び第2学年	教科【国語】
<p>1. 目的・意図</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それが達成されることによって、どのような効果・学習成果が期待されているのか、を明確に記述している。</p> <p>2. ねらい</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>3. 内容</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>4. 方法</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>5. 評価</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p>	<p>1. ねらい</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>2. ねらい</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>3. 内容</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>4. 方法</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p> <p>5. 評価</p> <p>この言語活動のねらいが、単元や単元中の各単元などでのねらいの観点から、何を達成しようとしているのか、それを達成するために、どのような学習活動が必要であるのか、を明確に記述している。</p>	<p>この欄は授業で実施する言語活動のねらいを記入します。</p> <p>この欄は授業で実施する言語活動のねらいを記入します。</p> <p>この欄は授業で実施する言語活動のねらいを記入します。</p>

学年ごとのまとまりでシートを作成した。

②授業実践の記録

部会では国語科における言語活動を充実するために、部会テーマに基づき、研究授業を行った。指導案の作成、授業後の研究協議において、大学教授および指導主事が指導することでリテラシーリーダーの育成を図った。

<p>I 小学校での実践記録 【第2学年】</p> <p>1 単元名・教材名：ことばっておもしろいな</p> <p>2 言語活動充実のための手立て</p> <p>ア 読んだことを、自らの知識や経験に位置づける。 児童はこれまでの経験から多くの言葉を獲得しているが「音や様子を表す言葉」との認識はない。そこで、教材文の内容を、今まで培ってきた児童の知識や経験と結びつけた。そうすることで無意識に使っていたオノマトペの働きを整理させ、使える言葉とできると考えた。</p> <p>イ 体験から言葉を導き出す。 本時では、実際に音を出して「音を表す言葉」を見つける活動を行った。音を出すことで、実際に出了る音を聞く体験を言葉として表現するために思考力を働かせることができた。</p> <p>II 中学校での実践記録 【第2学年】</p> <p>1 単元名・教材名：随筆の味わい「徒然草」</p> <p>2 言語活動充実のための手立て</p> <p>ア 『徒然草』の作品「仁和寺にある法師」と「公世の二位のせうとに」を読み、筆者の人間に対する考え方や出来事についての自分の意見や考えについて根拠を示しながら自分の言葉で表現する言語活動を行った。</p> <p>イ 自分の既得の知識や経験と照合することに留意した。また、2つの作品の構成を比較し、根拠を明確にして自分の考えをまとめる言語活動を行った。</p>
--

2 成果と課題

新学習指導要領解説をもとに内容・形式を検討し、小学校（低・中・高）及び中学校（1学年・2学年・3学年）の言語活動チェックシートを作成した。各学年の指導事項と具体的な言語活動例を系統立てて示すことにより、当該学年でどのような言語活動を取り入れていくことができるのかを明確にすることができた。

今年度は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域を限定せず授業実践を行ったが、領域を絞り研究していくことにより、より成果が得られると考えられる。そのため、来年度は「思考・判断したことを話したり、聴いたり、話し合ったりする」という観点に重点を置き、言語活動の充実が図れるような指導法の改善を行っていく。

社会部会

社会科における言語活動の充実

渡辺 康弘（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立大間野小学校 教諭 福田悟之 越谷市立花田小学校 教諭 武田美沙
越谷市立西中学校 教諭 板井孝司 越谷市立栄進中学校 教諭 鈴木健弥
文教大学教育学部 非常勤講師 泊 善三郎

2 会合日程及び会場場所

5月 8日 委嘱状交付式 越谷市立中央市民会館
6月17日 第1回部会 増林地区センター
7月27日 第2回部会 増林地区センター
1月12日 第3回部会 越谷市立西中学校
1月22日 第4回部会 越谷市立西中学校

3 先進事例見学・研究授業等

11月25日 第27回 関東ブロック中学校社会科教育研究大会
1月12日 越谷市立西中学校研究授業（再掲）

4 社会科の言語活動充実に関する研究

1 研究の経過

(1) 研究の概要

新学習指導要領では、思考力・判断力・表現力の育成のために、各教科等において、言語活動の充実が図る授業の改善が求められている。社会科においては具体的な改善例が、小学校学習指導要領の各学年の目標（3）能力に関する目標に示されている。その内容の中で注目すべき点は、現行の指導要領では「調べたことを表現する」となっているが、新しく「考えたこと」が付け加えられたことで

ある。ただ調べたことをまとめたり、発表したりするのではなく、「調べて」、「考えて」、「自分の言葉で表現する」という一連の活動によって、ねらいに迫るのである。ゆえに、社会科としては特に表現力の育成こそが、言語活動の充実を図る取組みとして捉えられる。

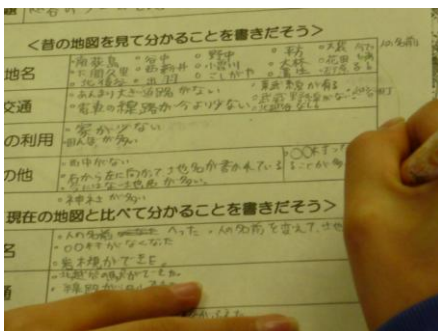
そのための手だてとして、以下の活動が考えられる。

①調べたことや考えたことをまとめる活動	
ア 書く	イ 図表に表す
ウ 絵・イラストに表す	エ 吹き出しに書く
オ 脚本を書く	などである。
②調べたことや考えたことを伝え合う活動	
ア 話し合う・討論する	イ 発表する

これらのことは決して新しい取組みではなく、今までにも実践してきたことである。社会科の授業において陥りがちな、教師による一方的な「ガイドツアー型」授業から、児童生徒による「マイツアー型」授業への改善を進め、児童・生徒の思考力・判断力・表現力の育成の視点で、言語活動の充実を図りながら研究を進めた。

(2) 言語活動チェックシート

新学習指導要領に示されている上記の言語活動例をもとにチェックシートを作成した。



越谷市公立小中学校言語活動チェックシート

		言語活動	チェック欄
1	調べたことや考えたことをまとめる活動	文章に書く、論述する	
2		図表に表す	
3		絵・イラストに表す	
4		吹き出しに書く	
5		脚本を書く	
6		記録する	
7		新聞・紙芝居を作る	
8	調べたことや考えたことを伝え合う活動	学級全体で話し合う・討論する	
9		小集団で話し合う・討論する	
10		自分の考えの根拠を説明する	
11		内容を説明する	
12		学級全体で発表する	
13		小集団で発表する	

(2) 実践の記録

平成22年1月22日(金)、越谷市立西中学校において第1学年の地理の授業研究会を実施した。グループ学習を取入れ、身近な地域の学習を行った。

学習課題 越谷の今と昔を比較しよう

①小学校で学習した内容や中学校で学習し

た内容で、主に地図の知識・技能の確認をする。

②身近な地域の地形図を見て、地域の様子を判断する。

③古い地図を見て現在の地域の様子と比較し変化を読み取る。

④活動の結果分かったことをまとめて発表する。

⑤新しい探求への意欲を向上させる。

- ・グループ活動を行った。普段はあまりグループによる活動を行わなかったが、活発な意見交換が行われたところもあった。
- ・気づきをかきたてる写真の資料を使い生徒の意欲が高まった。
- ・小中の連携を図り、以前に学習して習得した内容を活用し、新しい発見や自分の考えを発表していた。



2 成果と課題

【成果】

社会科のねらいに迫る授業の改善を図ることができた。生徒が主体的に学び、他の生徒とともに考え、判断したことや分かったことを自分の言葉で発表するように進み思考力、判断力、表現力の育成につながる展開であった。

リテラシーリーダーとして社会科における言語活動の充実を図りながら、思考力、判断力、表現力を育むということを他の教員にわかりやすく説明できるように、文教大学の泊先生の指導から研修することができた。

【課題】

言語活動の充実を図る場面を年間指導計画や単元指導計画に位置づけて指導することが大切である。そして、各学校で指導計画を作成する上での研修を行う必要がある。また、1時間単位での指導計画が各校において作成できていればいいが、細かい指導内容まで踏み込んだものは作られていないのが現状である。指導書等に頼らず、各学校のものを持ち寄り、検討し、自校の指導計画今後作成することが改善の第一歩である。

算数・数学部会

算数・数学科における言語活動の充実

長井 圭子（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立南越谷小学校 教諭 小菅和枝 越谷市立宮本小学校 教諭 仲 陽介
越谷市立中央中学校 教諭 武藤健司 越谷市立大袋中学校 教諭 平越紀英
文教大学教育学部 教授 町田彰一郎

2 会合日程及び会場場所

5月	8日	委嘱状交付式	越谷市立中央市民会館
7月	7日	第1回部会	市役所別館
8月	10日	第2回部会（視察）	東京・文京区 筑波大学附属小
8月	11日	第3回部会（視察）	東京・文京区 筑波大学附属小
9月	17日	第4回部会	越谷市教育センター
12月	11日	第5回部会	増林地区センター・公民館

3 先進事例見学・研究授業等

8月 10日 東京・文京区 筑波大学附属小
8月 11日 東京・文京区 筑波大学附属小

4 算数・数学科の言語活動充実に関する研究

1 研究の経過

(1) 研究の概要

新学習指導要領では、基本的な考え方の一つに思考力・判断力・表現力等の育成が示されている。また、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」では、知識・技能の活用など思考力・判断力・表現力等をはぐくむために重要な学習活動として、以下のような点を挙げて

いる。(中央教育審議会 2008)

- | |
|-----------------------------------|
| ① 体験から感じ取ったことを表現すること |
| ② 事実を正確に理解し伝達すること |
| ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりすること |
| ④ 情報を分析・評価し、論述すること |
| ⑤ 課題について、構想を立て実践し、評価・改善すること |
| ⑥ お互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させること |

そして、これらの学習活動の基盤となるものは、数式などを含む広い意味の言語であり、その中心となるのは国語である。しかし、すべてが国語科の役割とするのではなく、各教科における言語活動の重要性が述べられている。

特に、算数・数学についての改善の基本方針においても、「数学的な思考力・表現力は、合理的、論理的に考えを進めるとともに、互いの知的なコミュニケーションを図るために重要な役割を果たすものである。特に、根拠を明らかにし筋道を立てて体系的に考えることや、言葉や数、式、図、表、グラフ等の相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決したり、自分の考えを表現し伝え合ったりすることなどの指導を充実する」と示されている。

これらを踏まえ、他教科との関連を鑑みながら「算数・数学科における言語活動の充実」を課題とし研究を進めた。本部会では、本年度より文教大学町田 彰一郎教授に御指導をいただきながら、次の取組を行った。

①思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動を組み込んだ授業の研究

②算数・数学科における言語活動チェックシートの作成

(2) 実践の記録

①授業実践の記録

部会では算数・数学科における言語活動を充実するために、部会テーマに基づき、各リテラシーリーダーが自校で授業研究を実施し、実践事例を報告する協議において、大学教授および指導主事が指導することでリテラシーリーダーの育成を図った。

I 小学校での実践記録【第3学年】かけ算の筆算を考えよう(かけ算の筆算(2))

以下の3つの場面で言語活動を取り入れた。

- ① 自力解決で、図・式・言葉を結びつけながら解決させる。
- ② 話し合う場面で、隣同士で考えを伝え合う時間を設け、自分の考えを図、式、言葉などを用いて説明させる。その後、全体で話し合う。
- ③ ふり返りの中で、感想を言葉で記述させることにより自己の学びをはっきりさせる。

【授業を振り返って】

- ・途中までしかできなかつた児童はできたところまででよいことにしたため、安心して考えを伝えることができ、他の児童の発表から学んで続きをかき始める児童も見られた。また、全体での説明の際、電子黒板を使って、児童に書き込ませたり、教師が操作したりしながら考えをよりはっきりとしたものにするようにしてきたため、説明への意欲が高まった。
- ・自分の学びをふり返ることができるようになり、教師が一言添えて返すことで、意欲も高まった。



II 中学校での実践記録【第2学年】平行と合同

中学校第2学年の図形指導の証明の問題では、論証における生徒の実態をみると、「わかっているけどうまくいえない」という説明するための表現力の不足が抵抗感をうみ、無解答の率が高い領域となっている。このことは、図形の本来の楽しさや奥深さを感じる前に、「証明問題は難しい」や「証明はきらい」といった先入観をもつ原因となってしまう。そこで、今回の授業では、論理的な思考力の育成の前段階として、形式的な表現方法の取得を目標とし、証明への抵抗感をなくし、図形本来の楽しさを感じさせる。その際、ゲーム形式を取入れ、生徒が楽しく議論し合えるようにすることで、言語活動の充実を図った。

【授業を振り返って】

- ・1時間の中で、13ゲーム～7ゲーム行うことができるので、生徒は証明のパターンを何度も書くことになり、自然に証明の基本パターンを身につけ、本格的な証明の問題に関して生徒は抵抗感なく行うことができた。
- ・今後は、カードの難易度が違うものを用意して、生徒の理解度に合わせたゲームの開発につとめていく。



②言語活動チェックシートについて

教科名【算数】 校種【小学校】			
段階	学習過程	言語活動	
1	問題を理解する	分かっていること、求めていることを理解している。	
2	課題を見出す	既習内容を基にして、解決すべき内容を見出している。	
3	予想を立てる		
4	解決の見通しをもつ		
5	解決する	具体物や半具体物を操作している。	
6		目的に応じて、考えたことを図や数直線で表している。	
7		目的に応じて、考えたことを表やグラフで表している。	
8		分かったことを式や用語・記号を用いて表している。	
9		図や式に言葉を付け加えている。	
10		考えたことを具体物を操作したり、書いたりしながら説明している。	
11		根拠を明らかにして説明している。	
12		筋道を立て、算数・数学の言語、数学的表現を用いて説明している。	
13		他の考え方を自分の考え方の共通点や相違点、数理的な処理の良さ等の観点で比較して聞いている。	
14	一般化	既習内容を基に数や図形の性質を見出している。	
15	適用問題を解く		
16	終末	何が分かったか、何をどうするとよかったかを振り返って学習感想を書いている。	
17	まとめ	友達の考えのよさを書いている。	
教科名【数学】 校種【中学校】			
段階	学習過程	言語活動	
1	導入	既習の内容を振り返り、本時の課題との関連を考えている。	
2		本時の課題を理解する	質的な表現を数量的な表現に言い直している。
3		課題を既習事項や日常生活、他教科で学習したこと等と関連付けてとらえようとしている。	
4	解決する	使われている言葉を数学の用語や概念に置き換えて説明している。	
5		問題を分析して、分かっていること、求めることを明らかにし、自分なりの言葉で言い換えてみようとしている。	
6		特殊化したり、具体物を操作したりして、気づいたことを自分の言葉で表現する。	
7		数学の言葉である数、式、図、表、グラフ等で表現し、解決の方略を探る。	
8		分かっていること、求めることをときには図に描いたりして明確化する。	
9		もとになる考え、導くために使われた考え、導かれた結論等を明らかにして説明している。	
10		自分の考えと、友達の考えとの共通点や相違点を明らかにし、二つの考えの関係を明確にしている。	
11		数、式、図、表、グラフなどを使って分かりやすく説明しようとしている。	
12		だれでも自分の思いを述べることができ、それをきちんと受けとめる学級の雰囲気がある。	
13	一般化	解決したものや課題を振り返り、既習の内容や異なる考え方を整理し、相互関係を話し合っている。	
14	終末	何が分かったか、何をどうするとよかったかを振り返って学習感想を書いている。	
15	まとめ	友達の考えのよさを書いている。	

2 成果と課題

算数・数学科で言語活動を充実させるための指導上の手立てとして、「ものごとに接し、そこから何かを感じとる体験的活動」「手・足を使った身体的活動」「話し合いを中心とした強調的活動」「気づいたことを自分の言葉・図・表・グラフ・式でまとめる言語的活動」「既習と発展を行きつ戻りつする反復的活動」が特に重要である。

今後さらに、教材研究を進め、生活の中の様々な場面での問題を工夫していくとともに、子どもたちが、様々な方法で仮説を立て、既習を振り返り、具体的に操作したり、議論したりしながら発展的に考える学習体験を充実させていきたい。

理科部会

理科における言語活動の充実

鈴木 雅彦（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立越ヶ谷小学校 教諭 角本勲之 越谷市立蒲生南小学校 教諭 鈴木孝夫
越谷市立光陽中学校 教諭 牛島健一 越谷市立北中学校 教諭 石嶋雅和
文教大学教育学部 教授 山田陽一

2 会合日程及び会場場所

5月 8日	委嘱状交付式	越谷市立中央市民会館
6月12日	第1回部会	越谷市教育センター
8月 5日	第2回部会	越谷市科学技術体験センター
10月30日	第3回部会	江東区立浅間堅川小学校
12月11日	第4回部会	越谷市教育センター
2月 3日	第5回部会	越谷市立光陽中学校

3 先進事例見学・研究授業等

10月30日 第42回 全国小学校理科研究大会東京大会(江東区立浅間堅川小学校)
2月 3日 越谷市立光陽中学校研究授業

4 理科の言語活動充実に関する研究

1 研究の経過

① 研究仮説

学習指導過程の中に、記録・要約・説明・論述・発表・討議などといった言語活動の場を意図的、効果的に設定することで、自動・生徒の思考力・判断力・表現力が高まるであろう。

② 研究課題に迫るための手立て

思考力、判断力、表現力の育成を踏まえ、問題解決学習の各段階において、下

記のように言語活動を位置づけ、指導法の工夫・改善を図る。

ア) 問題発見：どんな事象から問題を発見したのか。なぜ、問題ととらえたのか。

これまでの知識とどんなことが矛盾するのか・・・などを文章にする。

イ) 予想・仮説：どのような根拠をもとに予想や仮説を立てたのかについて文章にする。併せて、相手にわかるように図などを活用しながら伝える。

ウ) 観察・実験（結果の整理を含む）：結果を正確に記録する。図やグラフの他、見たままを適切な言葉で表す。

エ) 考察：予想や仮説と検証方法、結果を分析し、どのようなことが言えるのか考察して問いに対する自分なりの答えを文章に表す。

オ) まとめ（話し合い・発表）：問題発見から考察までの一連の流れをまとめ、科学用語や図等などを用いて説明しあったり発表したりする。

③ 検証授業

ア) 単元名 『化学変化と原子・分子』（中学校第2学年）

イ) 授業者 越谷市立光陽中学校 教諭 牛島 健一

ウ) 授業の実際




【本時の目標】

金属と酸素が化合するときの質量の関係には規則性があることを見出し、説明できる。

【本時の展開：言語活動に視点を当てて】

学習活動・生徒の反応（言語活動）	教師のはたらきかけ・指導上の留意点
<p data-bbox="272 1391 1350 1491"><学習課題> マグネシウムの質量と酸化マグネシウムの質量には、どのような関係があるだろうか。</p> <p data-bbox="252 1503 935 1995">○ 本時の課題に対する「予想・仮説」を立てる。 ・マグネシウムの質量が増えると酸化マグネシウムの質量も比例して増えるだろう。理由は、結びつくマグネシウム原子と酸素分子の割合は決まっていると思うから。 ・マグネシウムと化合する酸素の質量は、マグネシウムの質量によって決まっていると思う。理由は、マグネシウム原子2個と化合する酸素分子の数は、1個だからである。</p>	<p data-bbox="959 1503 1366 1827">○ 原子カードを用いて、マグネシウムと酸化マグネシウムの質量の関係を考え、友だちに説明させる。(既習のステールウールの燃焼と関係付けながら考えさせる。)</p> <p data-bbox="959 1850 1366 1995">○ 化学反応式 ($2\text{Mg} + \text{O}_2 \rightarrow 2\text{MgO}$) の概念を押さえた上で予想・仮説を立てさせる。</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・マグネシウムの質量が増えると酸化マグネシウムの質量も比例して増えると思うが、その際には、マグネシウムの原子一つ一つを完全に酸化させ 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 定量実験の留意点（加熱の回数と化合物の質量の関係について）も押さえる。
<p>「マグネシウムの燃焼実験」「結果の整理」【省略】</p>	
<p>実験結果をもとに、学習課題に対する自分なりの考え（考察）をまとめよう。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 実験結果から、自分で立てた「予想・仮説」についてどのようなことがいえるか「考察」する。 ・ 予想したとおり、マグネシウムの質量と酸化マグネシウムの質量はほぼ比例の関係にあった。しかし、完全に比例の関係にあるとは言い難い結果もあった。誤差が生じた理由として、酸化が不完全であったことが考えられる。（原子モデルを使用して説明） ・ グラフからマグネシウムと酸化マグネシウムの質量比は3：5であり、マグネシウムと酸素の質量比は3：2であるといえる。このことから、金属と酸素が化合するときの質量比は一定であるといえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 実験結果のグラフや原子カードを用いて考えさせる。 ○ グラフから質量比を導き出すよう指示をする。 ○ 質量比を導き出した班には、「なぜ3：2になるのか」を考えさせる。資料として、周期表を提示する。 

2 成果と課題

① 成果

- 学習過程の各段階において、化学反応式等の基礎的・基本的な知識を習得させた上でそれらを活用して考えさせたことで、思考力・判断力・表現力の伸びに繋がった。
- 記録・要約・説明・論述・発表・討議といった言語活動の中で、科学用語を用いて表現しようとする生徒が増えた。これに伴い、授業における発問や指示に対する理解・応答も速くなってきた。

② 課題

- 「導入段階」で学習に対する興味・関心をもたせ、自ら予想や仮説を立てるようになることが言語活動の充実には不可欠である。そのためにも、深い教材研究及び、教材・教具の効果的に活用した指導法の工夫・改善が必要である。

道徳部会

道徳における言語活動の充実

磯山 貴則（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立東越谷小学校 教諭 岡村美香 越谷市立平方小学校 教諭 阿佐見奈緒
越谷市立武蔵野中学校 教諭 柿澤英和 越谷市立大袋中学校 教諭 藤井美恵
文教大学教育学部 教授 栗加 均

2 会合日程及び会場場所

5月 8日	委嘱状交付式	越谷市立中央市民会館
7月10日	第1回部会	増林地区センター
8月25日	第2回部会	増林地区センター
10月16日	第3回部会	増林地区センター
11月17日	第4回部会	越谷市立平方小学校
1月19日	第5回部会	宅建会館

3 先進事例見学・研究授業等

11月17日 越谷市立平方小学校研究授業（再掲）
1月29日 平成20・21年度文部科学省道徳教育実践研究事業推進校
（東京都足立区立第十二中学校）視察
2月26日 平成21年度全国小学校道徳教育研究会第32回研究発表大会
（東京都中野区立鷺宮小学校）

4 道徳の言語活動充実に関する研究

（1）研究の経過

平成20年の1月に出された、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について」において、道徳教育の改善の基

本方針が3点に分けて示されている。この基本方針の2点目には「道徳の時間における子どもの受け止めは、小学校と中学校では相当に異なっていることから、幼児期や高等学校段階での改善を視野に入れつつ、より効果的な教育を行うために、小学校と中学校の指導の重点や特色を明確にする。」と示されている。この基本方針の2点目では道徳の時間の授業改善の方向性を示し、道徳の時間の形式化、形骸化ともいわれる課題や児童生徒の受け止めのマイナス傾向の問題を踏まえ、道徳の時間の改善について、特に学校段階の重点や特色を明確にして、創意工夫をはかり、より実効性のある指導を実現していくことを求めている。

また、改善の具体的事項においては、7. 教育内容に関する主な改善事項(1) 言語活動の充実を受け、(カ)に「道徳的価値観の形成を図る観点から、書く活動や語り合う活動など自己の心情・判断等を実現する機会を充実し、自らの道徳的な成長を実感できるようにする」と示している。

これらを踏まえ、他教科との関連を鑑みながら「道徳における言語活動の充実」を課題とし研究を進めた。本部会では、本年度より文教大学栗加 均准教授に御指導をいただきながら、次の取組を行った。

- ①ねらいとする道徳的価値を深める話し合い活動の工夫
- ②自分の内面を見つめ道徳性を高める各活動の工夫

(2) 授業実践 (小学校6学年の実践)

部会では国語科における言語活動を充実するために、部会テーマに基づき、研究授業を行った。指導案の作成、授業後の研究協議において、大学教授および指導主事が指導することでリテラシーリーダーの育成を図った。

[主題名 出店開き]

[4- (1) 役割の自覚・責任 関連内容項目2- (2) 思いやり親切]

[言語活動の充実のための手立て]

① 話し合い活動の工夫

協同的な学びを取り入れるために、活動的・協同的な学びを組織する。授業においては「伝え合う・聴き合う」関係作りを大切にして、教師対児童を超えて児童対児童の関係の中で道徳的価値を深め合うことを目標にしていく。そのために、【小集団男女混合4人で互いに聴き合うことによる、協同的な学びを組織すること】を授業の中に取り入れ、より活発な話し合いによる言語活動を行う

こととした。

ア 自分の考えをもって話し合いに参加する。(付箋(ワークシート)に整理する)

イ 小集団に考えを持ち寄って、考えを整理する。

ウ 友達の考えを知って話し合う。

エ クラス全体の中で発表する。

以上の過程を踏むことで、埋もれていた考えを引き出し言語活動をより活発に行うことができると考えた。

② 書く活動の工夫

ア 小集団での話し合い活動用に自分の意見を付箋に整理する。

イ 展開の後段部分の「みつめる」の段階で「自分と対話カード」を用いる。

児童が自分自身を振り返り、書き表すことで本時のねらいとする道徳的価値が児童自身のものになっていくと考えた。授業の取り組み方を自己評価し、本時を通して最終的に明日の自分、未来の自分に少しでも勇気や希望をもつことができることが重要であると考えた。

2 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

①言語活動を充実させるために、実践的な授業研究を中心とした取組ができた。

主題や資料の検討、話し合い活動のための4人グループ編成、記述させるワークシートや名前カードを貼り付けるボード等、子どもを活かすための具体的な手だてが研究できた。

②話し合い活動に視点をおき、児童生徒の発言場面を多く取り入れた授業を行った。

小集団での意見交換、挙手による教師側の指名、役割演技など、状況に応じて子どもが自分の意見を言しやすいような、授業形態を工夫した。特に小集団では、各自が自信をもって自分の意見を述べる場面が見られた。

(2) 課題

「書く活動」をいっそう充実させることによって、さらなる言語活動の充実を図りたい。授業後の感想や自己評価などを書かせることによって、事後指導に活かしたり、後に自分を振り返らせたりする材料としていく。「書く活動」を授業の中で、どの場面でどのように行うことが効果的かは今後の課題である。

特別活動部会

特別活動における言語活動の充実

青木 元秀（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立新方小学校 教諭 小林和雄 越谷市立蒲生小学校 教諭 森下久乃
越谷市立大相模中学校 教諭 村上尊 越谷市立千間台中学校 教諭 白山雅生
文教大学教育学部 教授 米津光治

2 会合日程及び会場場所

5月 8日	委嘱状交付式	越谷市立中央市民会館
6月 19日	第1回部会	越谷市教育センター
11月 13日	第2回部会	越谷市立蒲生小学校
12月 15日	第3回部会	越谷市教育センター
2月 3日	第4回部会	越谷市教育センター

3 先進事例見学・研究授業等

8月 4、5日 第53回 全国特別活動研究競技大会・埼玉大会
11月 13日 越谷市立蒲生小学校 研究授業（再掲）

4 特別活動の言語活動充実に関する研究

1 研究課題について

「新学習指導要領における特別活動指導法の工夫・改善」～ 言語活動の充実 ～
言語活動は、特別活動の授業を展開するうえで欠くことのできないものである。子どもたちが学級や学校の諸問題について話し合い、よりよく解決していくためには、自分の考えを相手に伝えるだけでなく、それぞれの考えについて理解し、比較、検討する必要がある。したがって、発表すること、聞くこと、話し合うこと技能を身に付けるだけでなく、その技能を十分に発揮しなければよりよい話し合い活動とな

らない。新学習指導要領の趣旨に則り、発達段階に応じて適切な指導をすることが言語活動の充実に繋がるものと捉え、研究主題を設定した。

2 研究の経過

(1) 指導上の課題

①特別活動全般

- ・学校によって実施状況の違いが大きい。

②学級活動について

- ・共通事項「(1) 学級や学校の生活づくり」の実践に取り組んではいるが、計画委員会の進め方や話し合い活動の進行、係活動の組織づくり等、細かい部分に課題がある。
- ・事前、本時、事後を通じた教師の指導のポイントについて共通理解が図られていない。
- ・話し合い活動が充実する学級づくり（人間関係づくり）が大切であるので、学級経営との関連を図る必要がある。
- ・小学校1年生～6年生、中学校1年生～3年生の9年間を見通した系統的な積み上げがなされていない。
- ・生活上の諸問題を解決するには、本音の話し合いが必要であるため、児童・生徒同士の望ましい人間関係が醸成されている必要がある。
- ・学級活動を準備する時間の確保が困難になっている。
- ・教科指導を中心に進められる傾向があるため、学級活動について学年で統一して取り組んでいくことが困難となっている。(中学校)
- ・学校行事や生徒会活動に向けての実務的な話し合い活動に偏重している実態も見られる。(中学校)

③児童会活動、生徒会活動について

- ・異年齢集団での話し合い活動の指導について共通理解ができず、児童・生徒の自発的、自治的活動となっていない場合もある。

④その他

- ・異年齢集団活動の特質を生かした学校行事（縦割り遠足）を実施しているが、日常的な活動の充実に課題がある。

(3) 授業研究の実践

①研究の視点

- ・一人ひとりの児童が自分の考えをしっかりと伝えることができる。
- ・自分の考えと友達のことを比較したり、統合したりしてよりよい解決方法を決める話し合いをする。

②具体的な手立て

- ・事前に議題を知らせ、児童が自分の考えを進んで発表することができるよう、学級活動ノートを活用した。
- ・教師が、事前に学級活動ノートに目を通し、励ますようなコメントや声かけをして自身をもたせ、進んで発表できるようにした。
- ・輪番制で計画委員会を分担する中で、それぞれの役割の大切さを意識して、事前の準備から積極的に児童が関われるようにした。

2 成果と課題

(1) 成果

- ・特別活動に必要な言語活動について研究協議を進める中、学級活動の指導の充実が核となることを確認し、言語活動チェックシートの作成を通して発達段階に応じた適切な指導について深めることができた。
- ・学級活動における言語活動は、話し合い活動において賛成意見や反対意見を交わす中で、発表された解決方法の中からよりよいものを考える話し合い活動を展開することで充実を図ることができることが分かった。
- ・発達段階に応じた指導については、小学校1年生から中学校3年生まで段階的に指導する必要があるが、基本となる項目については共通しており、言語活動チェックシートにも反映できることが分かった。

(2) 課題

- ・言語活動チェックシートの作成にあたり、発達段階に応じた言語活動にかかわる指導事項について結論を導き出すことができなかった。
- ・発達段階に応じて適切に指導していくためには、教員が校内において共通理解を図るべき指導事項について選別し、参考となる資料を作成、活用する必要があることが明らかになった。

総合的な学習の時間部会

総合的な学習の時間における言語活動の充実

佐藤 泰弘（越谷市教育委員会）

1 リテラシーリーダー及び指導者

越谷市立桜井小学校 教諭 小檜山佳代子 越谷市立城ノ上小学校 教諭 酒井豊子
越谷市立東中学校 教諭 鳥海一男 越谷市立千間台中学校 教諭 寺嶋謙一
文教大学教育学部 教授 嶋野 道弘 文教大学教育学部 准教授 手嶋 将博

2 会合日程及び会場場所

5月 8日	委嘱状交付式	越谷市立中央市民会館
6月 26日	第1回部会	越谷市教育センター
7月 27日	第2回部会	宅建会館
10月 16日	第3回部会	宅建会館
1月 13日	第4回部会	宅建会館
2月 5日	第5回部会	宅建会館



3 先進事例見学・研究授業等

8月 19日	横浜市立戸部小学校校内研修
11月 24日	越谷市立千間台中学校授業研究会
12月 11日	横浜市立戸部小学校授業研究会



4 総合的な学習の時間の言語活動充実に関する研究

1 研究の経過

(1) 研究の概要

今回の学習指導要領の改訂では、総合的な学習の時間を「探究的な学習」にすることが明確に示された。この学習が機能するためにも、①問題の解決や探究活動を行うこと、②協同的に学習すること、③体験と言葉を重視すること、以上3点が大変重要である。そこで、「探究的な学習」を生み出す学習過程の基本モデル

となるものを作成し、上記3点を重視した活動を核に、教師が果たすべき役割やその際のポイントを厳選して示す。また、「言語活動チェックシート」を作成し、体験と言語を濃密に結び合わせ、子どもたちの「思考力・判断力・表現力」を育てる一助とする。

【取組】

- ① 『探究的な学習』を生み出す「学習過程の基本モデル（教師の役割）」の作成
- ② 総合的な学習の時間における「言語活動チェックシート」の作成

(2) 実践の記録

- ① 『探究的な学習』を生み出す「学習過程の基本モデル（教師の役割）」の作成

8月と12月に元文部科学省総合的な学習の時間モデル事業研究校である、横浜市立戸部小学校を視察した。8月は研究の概要や授業実践の御紹介を、12月には実際の授業の様子を参観した。特徴的なものは「しかけ」「学びどころ」である。

「学びどころ」とは、目指す児童像に近づくため、子どもの活動や意識が大きく変容したり深まったりするところ（場面）。教師にとっては「学ばせどころ」。

「しかけ」とは、「学びどころ」を意図的に作り出す手立てのこと。

(横浜市立戸部小学校研究紀要より一部抜粋加筆)

戸部小学校はこの2つを強く意識して、入念に考えて、ねらいを達成するために効果的に活用している。本部会は、この「しかけ」「学びどころ」を意識した授業づくりを目指し、基本モデル図を作成した。

『探究的な学習』を生み出す学習過程の基本モデル～教師の役割（行うべきこと）～

学習過程	活動内容	教師の役割(学習指導のポイント)
① 課題の設定	<ul style="list-style-type: none"> ○共通体験（教師の意図的な）をする。 ○共通体験後の話しをする。 ○共通体験と生活体験（今までの個々の）を通して、課題意識を持つ。 ○課題を設定する。 ○情報収集のための計画を立てる。話し合いをする。 ※体験活動が長い探究活動の原動力 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒の発達や興味関心を適切に把握したうえで、対象に直接触れらるなど五感に響くような共通体験活動を行う。 ・課題設定では「自分で」にならような課題を設定させる。（これまでの自分の考えとの「ずれ」「隔たり」、対象への「あこがれ」「可能性」を感じさせ、体験の中で「比較・分類・関連付け・類推」させることで探究に広がりや深みのある課題）
② 情報の収集	<ul style="list-style-type: none"> ○目的意識を持って必要な情報を取り出したり収集したりする。観察・実験・見学・調査・探求・追体験など ○情報収集の見直しをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題解決のための情報収集を自覚的に行わせ、収集した情報を適切な方法で蓄積させる。 ・学習活動によって収集される情報は多様であり、情報の取捨選択させることも大切である。（この段階で「課題の設定・情報の収集・整理・分析・まとめ・表現」が何度も繰り返され、スパイラルに高まっていく。この時のグループや個々への考えさせるアドバイスもしかけと考えられる。）
③ 整理・分析	<ul style="list-style-type: none"> ○収集した情報を、整理したり分析したりする。比較・分類・関連付け・類推などを行い、情報と筋。 ○まとめたものをもとに話し合いをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・目指す児童生徒像に近づくため、収集した情報を可視化し（イメージマップやK法など）、比較・分類・関連付け・類推などをしやすくする。 ・結んだ情報から、新たな課題を導き出す話し合いをさせる。
④ まとめ・表現	<ul style="list-style-type: none"> ○気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する。（誰に、何を、どのような方法で伝えたいか） 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者への表現だけでなく、自分への表現（考えの変容・生き方・実践等）もある。 ・相手意識・目的意識をはっきり持って表現させる。 ・まとめは順番で行わせ、自分が今、一番伝えたいことや考えたことを押さえる。

※「しかけ」とは、目指す児童生徒像に近づくため、子どもの活動や意識が大きく変容したり深まったりするところを意図的に作り出す手立てのこと。



《中学校での授業実践》 越谷市立千間台中学校 第2学年：授業者 教諭 寺嶋 謙一

- 1 単元名 点字を通して自分たちのできることを考えよう（福祉）
- 2 単元目標
 - ・本の点訳を通して、点訳本を作成することの困難さを体験し、点訳本を必要とする人のために何ができるかを考えられるようにする。
 - ・街にある点字を調べることで、共生社会の構築に向けてあるべき社会の姿について考えられるようにする。
- 3 「しかけ」と「学びどころ」

「しかけ」 →視覚障害者の方をゲストティーチャーとして招き、生徒自作の点訳本を読んでもらう。視覚障害者の生活等についてお話を伺う。

「学びどころ」→今まで一生懸命作ってきた点訳本が、視覚障害者の方にとって読みやすいものではなかった。なぜそうなったのか、これからどうすればよいのか。
- 4 その後の活動 新たな決意の元、点訳を再開、完成。後に、自分の体験活動を発表。その際、必ず、自分の考え、これからの決意を発表する。

② 総合的な学習の時間における「言語活動チェックシート」の作成

越谷市公立小中学校言語活動チェックシート		教科等名 【総合的な学習の時間】
		校種 【小・中・共通】
学習過程	言語活動	チェック欄
1	体験活動などを通して、様々なことに気付き、感想などにまとめている。	
2	課題の設定 他者との感想などの交流から、課題意識を高めている。	
3	情報の収集 設定した課題を基に、必要な情報を得るために目的を明確にして調査したり、インタビューしたりしている。	
4	情報の収集 体験活動を通して得た情報をメモしたり、文章に表現できる。	
5	情報の収集 文章、グラフ、図、表から必要な情報を読み取ることができる。	
6	情報の収集 グループや集団の中で、情報収集の仕方や、収集した情報について意見交換をしている。	
7	整理・分析 収集した情報をもとに意見交換をしている。	
8	整理・分析 得られた情報を比較、分類、関連付けし、整理を行っている。	
9	まとめ・表現 相手意識や目的意識を明確にしてまとめたり、表現したりしている。	
10	まとめ・表現 まとめたり、表現したりする活動から、自分の考えや新たな課題が生まれている。	
11	共通 活動の振り返りで自分の考えや思いを表している。	
12	共通 活動の中で、教科で身に付けた力を生かして表している。	



学習過程のそれぞれの段階において「見られる」とよい言語活動」「ぜひ推進したい言語活動」として例示した。

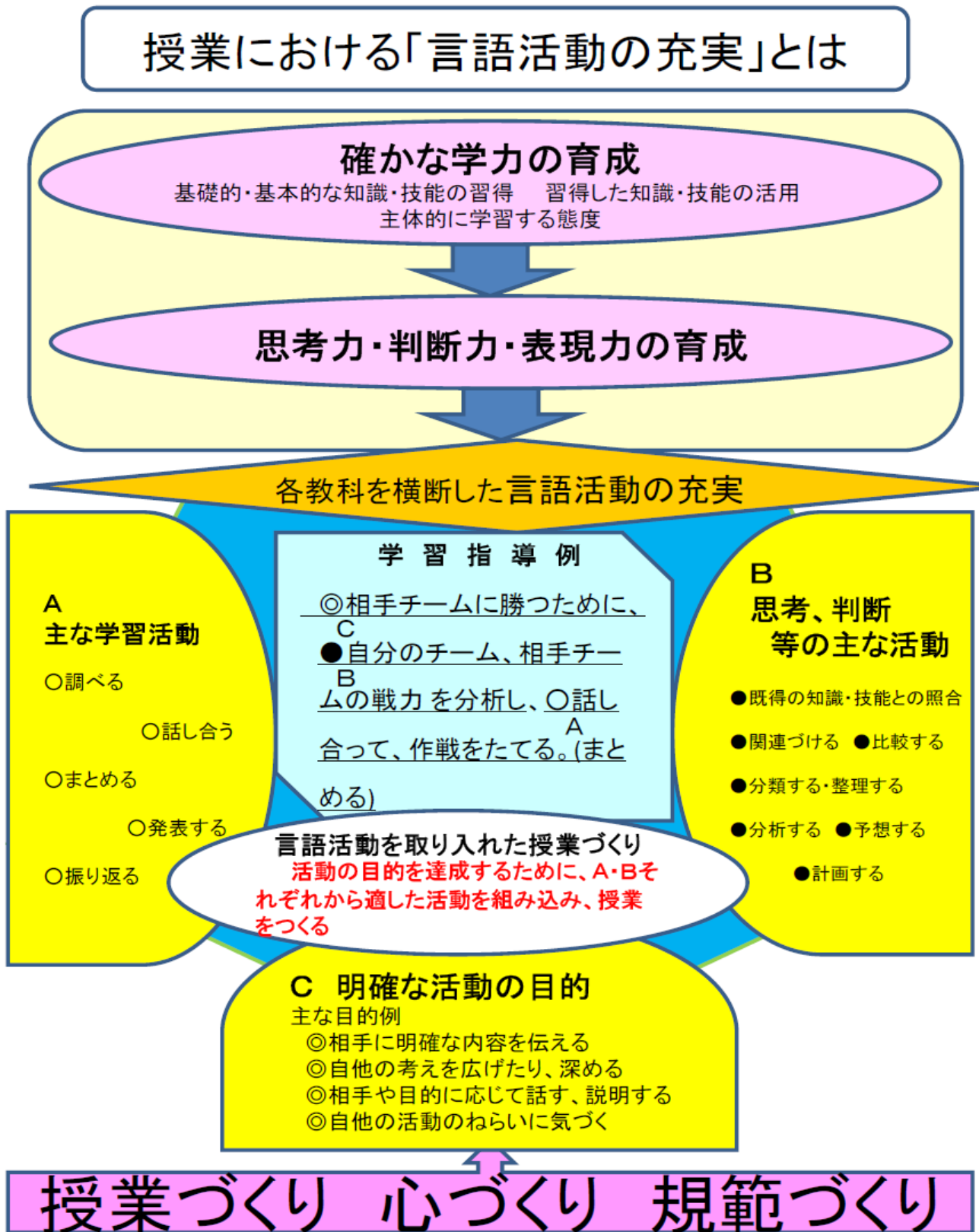
2 成果と課題

(1) 成果

- ・広く市内の先生方に活用していただけるような、「学習過程の基本モデル」及び「言語活動チェックシート」が作成できた。
- ・作成の過程で、「探究的な学習」とは何か、「探究的な学習」を高めていくにはどういう手だてが必要なのか、そのために教師はどのような役割をすればよいのかがよく理解できた。

(2) 課題

- ・「学習過程の基本モデル」及び「言語活動チェックシート」を実際に使って単元計画を立て、授業を実施し、さらに、よりよいものに高めていくことが大事である。
- ・新学習指導要領では、総合的な学習の時間が縮減され、年間指導計画の内容の見直しが急務の課題になっている。これを契機に1つ1つの単元が「探究的な学習」になるように整えていかなければならない。



5-2 概念図の解説

1 言語活動チェックシート作成のための過程

各教科等における言語活動の充実、今回の学習指導要領の改訂において各教科等を貫く重要な改善の視点であり、言語は、知的活動（論理や思考）だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤である。

言語活動の充実に当たっては、まず国語科において、話すこと・聞くこと、書くこと、読むことの「内容」にそれぞれに記録、要約、説明、論述といった言語活動例が示され、指導事項を指導するものとしている。さらに、各教科等の指導に当たっては、児童・生徒の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童・生徒の言語活動を充実することとされている。そこで、知的活動（論理や思考）及びコミュニケーションや感性・情緒の基盤となる言語の重要性を踏まえ、国語科の学習だけでなく、各教科を含む教育活動全体において、言語活動の充実を図り、言語に関する能力を高める活動の工夫を行うこととした。

まず、各教科等のリテラシーリーダーや大学の教員、指導主事がそれぞれの教科における言語活動例を洗い出し、各教科で活用できる言語活動チェックシートの作成に取り組んだ。その上で、それらの中から全ての教科に共通する言語活動例を整理した。その過程で児童・生徒が授業中に思考力、判断力等を働かせる言語活動を「調べる」「話し合う」「発表する」「まとめる」「振り返る」の5つのカテゴリーに分類した。また、思考や判断等は目に見えにくいものであるため、授業者はそれらを表現したもので見取ったり、評価したりすることとなる。この視点を踏まえて、授業における「言語活動の充実」を概念図にまとめた。

2 言語活動の充実についての概念図について

言語活動については、現行の学習指導要領でも、国語科では、言語能力や国語を尊重する態度は内容の取扱いに示された言語活動を通して育成することが基本となると述べられている。他教科においても言語活動という文言は使われないものの、例えば、小学校社会科の改定の要点には「社会的事象に関心をもち、公正に判断できるように、各学年の発達段階に応じて、観察、調査したり、各種の資料を活用したり、調べたことを表現したりするとともに、社会的事象や意味の働きなどを考える力を育てること」とある。しかし、現行の学習指導要領で学んできた児童生徒のPISA調査などの各種調査からは、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、

知識・技能を活用する問題に課題があること明らかになっている。そこで、これらの課題を解決し、思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、各教科等の授業で言語活動を取り入れることはもちろんのこと、授業者が、その言語活動を組み込む際に以下の点に留意する必要があると考えた。

「活動の目的」を達成するために、「主な学習活動」と「思考・判断等の主な活動」の中から適切なものを選択し、組み込む。

具体的には以下に示す言語活動例が考えられる。

例 1 体育の授業における言語活動例

相手チームに勝つ（活動の目的）ために、自分のチームと相手チームの戦力を分析（思考・判断等の主な活動）し、話し合っ作戦を立てる（まとめる）。

例 2 国語の授業における言語活動例 1

「音や様子を表す言葉」を自覚して使えるようにするため（活動の目的）に、教科書教材「音や様子を表す言葉」を読み（新情報を得る・調べる）、既得の知識・技能と照合（思考・判断等の主な活動）し、考えをまとめる。

例 3 国語の授業における言語活動例 2

「音や様子を表す言葉」を題材としたクイズを作るため（活動の目的）に、身の回りから集めたり、調べたり（調べる）したものを分類・整理（思考・判断等の主な活動）する話し合いをしてクイズとして発表する（発表する）。

【キーワード】

リテラシーリーダー 言語活動の充実 指導法 リーダー養成 国語科 算数・数学科 社会科 理科 総合的な学習の時間 道徳 特別活動

【人数規模・研修日数（回数）】

人数規模：D 51名以上（LL：28名・SLL：45名）

研修日数：C 4～10日（各部会単位の回数。LL研修：各部会7部会×5～7回、

SLL研修：2回）

【問い合わせ先】

機関名：文教大学 所属・職名：教育学部・准教授

担当者：手嶋 將博

担当者連絡先：〒343-8511 埼玉県越谷市南荻島 3337 文教大学教育学部教職研究室

TEL：048(974)－8811(代) Email：mtejima@koshigaya.bunkyo.ac.jp

連携先：埼玉県越谷市教育委員会（越谷市教育センター）

TEL：048(960)－4150（指導課） Email：10221200@city.koshigaya.saitama.jp